

# 特発性心室細動に対する植込み型除細動器治療における 適応別作動率とデバイストラブルに関する単施設長期 観察の報告

福田昌和<sup>1</sup> 吉賀康裕<sup>1</sup> 橋本慎太郎<sup>1</sup> 内田智之<sup>1</sup>  
久岡雅弘<sup>1</sup> 藤井翔平<sup>1</sup> 石口博智<sup>1</sup> 小室卓也<sup>2</sup>  
上山 剛<sup>3</sup> 清水昭彦<sup>4</sup> 矢野雅文<sup>1</sup>

【背景】特発性心室細動における治療の中で植込み型除細動器(ICD)の果たす役割は重要である。一方で比較的若年でデバイス植込みを行われこととなる特発性心室細動の患者において、長期の経過におけるデバイストラブルは大きな問題である。特発性心室細動に対するICD治療における作動率とデバイストラブルについてICD植込み適応との関連およびその時期について検討した。【方法と結果】1996年12月から2022年8月の期間、単施設においてBrugada症候群, QT延長症候群, 特発性心室細動に対して植込み型除細動器植込みを行った連続症例66例を対象とした。平均観察期間9.9年(IQR 3.8-15年), 男性52例(79%), 平均年齢47歳(33-59歳)において予後, ICD適切作動, リード不全や感染などのデバイストラブルを Kaplan-Meier 曲線において検討した。一次予防, 二次予防で比較すると, ICD適切作動は二次予防群が一次予防群より有意に多く( $p = 0.04$ ), 予後やデバイストラブルは両群に差を認めなかった。適切作動・不適切作動は経年的に増加する傾向があったが, デバイストラブルについては植込み後7年から10年の間で比較的多く生じており, イベントの発生時期についてもそれぞれ特徴がみられた。【結語】特発性心室細動のように長期にデバイス治療が必要となる患者において, 作動率やデバイストラブルの可能性も含めた十分な適応判断と慎重な経過観察が必要と考えられた。

**Keywords**

- 特発性心室細動
- 植込み型除細動器
- デバイストラブル

1 山口大学大学院医学系研究科器官病態内科学  
(〒755-8505 山口県宇部市南小串1-1-1)  
2 山口大学大学院医学系研究科保健学科  
3 山口県立総合医療センター循環器内科  
4 宇部興産中央病院

*Device Therapy and Complications Based on Indication in Implantable Cardioverter-Defibrillator Treatment for Idiopathic Ventricular Fibrillation : A Long-Term Observational Study from a Single Center*

*Masakazu Fukuda, Yasuhiro Yoshiga, Shintaro Hashimoto, Tomoyuki Uchida, Masahiro Hisaoka, Shohei Fujii, Hironori Ishiguchi, Takuya Omuro, Takeshi Ueyama, Akihiko Shimizu, Masafumi Yano*

